

新交響樂團第一〇七回演奏会

一九八五年四月七日

日本の交響作品展——九

小山清茂



「日本の土の匂いを伝える作曲家」小山清茂はよく
そう言われる。彼は、わが国の民族音楽の旋律やリ
ズムを、自作の素材として大胆に使うので、そう言
われるのも無理はないが、私は、彼の音楽が人に訴
えかけてくるのは、「土の匂い」とはあい容れない、
近代の音楽的造形とそれとの葛藤の方にあるように
思う。「土の匂い」は、彼の音楽にとっての、しぶ皮
のようなものではないか。

私は是非とも、その中身をかいでみたいと思う。

芥 川 也 寸 志

日本の交響作品展—9

小山 清 茂



写真・木之下 晃

管弦楽のための「信濃囃子」…………… 1946
SHINANO-BAYASHI for Orchestra

弦楽のための「アイヌの唄」…………… 1964
SONG OF AINU for Strings

テープを伴った管弦楽のための「鄙歌」第1番…………… 1976
HINAUTA for Orchestra

管弦楽のための「うぶすな」(新交響楽団委嘱)…………… 1985
UBUSUNA for Orchestra
ピアノ 渡辺 達

交響組曲「能面」…………… 1959
Symphonic Suite NŌMEN

1985年4月7日(日)2時

東京文化会館

指揮 芥川也寸志
演奏 新交響楽団
構成 小宮多美江

主催 新交響楽団
後援 毎日新聞社
協賛 (社)日本作曲家協議会
(株)コンサート・サービス

ピアノ 渡辺 達

1949年東京生まれ。1968年ICU人文科(音楽学専攻)卒。ピアノを半沢誠子、加勢るり子の両氏に師事。

新響には11年間在籍し、その間、「ペトルーシュカ」、モーツァルトの「コンツェルト・ロンド」等のソロを担当した。学生時代からの室内楽活動と併せ、オーケストラとの協演、とりわけ現在、モーツァルトのピアノ協奏曲全曲演奏に力を注いでいる。現在フリー。

Handwritten musical score for a symphony, measures 161 to 177. The score is written on multiple staves for various instruments and voices.

Measures 161-177:

- Fl (Flute):** Measures 161-177. Includes a trill in measure 177.
- Picc (Piccolo):** Measures 161-177. Includes a trill in measure 177.
- Ob (Oboe):** Measures 161-177. Includes a trill in measure 177.
- Cl (Clarinet):** Measures 161-177. Includes a trill in measure 177.
- Fg (Fagott):** Measures 161-177. Includes a trill in measure 177.
- Cor (Corni):** Measures 161-177. Includes a trill in measure 177.
- Tbn (Tromboni):** Measures 161-177. Includes a trill in measure 177.
- Tuba:** Measures 161-177. Includes a trill in measure 177.
- Drum (大鼓):** Measures 161-177. Includes a trill in measure 177.
- Timpani (ティンパニ):** Measures 161-177. Includes a trill in measure 177.
- Violins (Violini):** Measures 161-177. Includes a trill in measure 177.
- Violas (Violenze):** Measures 161-177. Includes a trill in measure 177.
- Celli (Violoncelli):** Measures 161-177. Includes a trill in measure 177.
- Double Basses (Bassi):** Measures 161-177. Includes a trill in measure 177.

Measures 176-177:

- Vl (Violini):** Measures 176-177. Includes a trill in measure 177.
- Vle (Violenze):** Measures 176-177. Includes a trill in measure 177.
- Vc (Violoncelli):** Measures 176-177. Includes a trill in measure 177.
- Cl (Bassi):** Measures 176-177. Includes a trill in measure 177.

管弦楽のための「信濃囃子」 昭和二十一年

信濃囃子

柿の実が色づき、山のあけびが口をあける頃には、豊年万作を祝う秋祭りがやってくる。鎮守の森には大幟がはためき、境内へ向う道の両側には雪洞^{ほんぼり}が立ち並び、ひんやりとした夜空に半月が黄ばむ夕暮れ、近郷近在から、笛太鼓の神楽が練り込んで来る。

若者は、豆絞りの鉢巻きに尻はしより。子供たちも、手作りの新しい草履をはかせて貰って神楽のあとからついて来る。

やがて社前に並んだ神楽は、それぞれに獅子舞を奉納する。

社殿の壁には、祝儀の金額を書いた紙が張られ、紋付袴の顔役が参詣人に神酒を振舞っている。

以上は、拙著「田螺のうたが聞こえる」から引用したものだが、三十才を過ぎた私の、望郷の念やみ難く、というのが作曲当時の心境であった。

楽器編成：

フルート2（2番はピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ4台、鈴、タンブリン、バス・ドラム、スネア・ドラム、ピアノ、弦5部

弦楽のための「アイヌの唄」 昭和三十九年

アイヌの唄

桐朋学園オーケストラが、アメリカ公演で使うための短かい弦楽だけの曲を書いてくれという事で、私としては、生れて初めて弦楽合奏というものを書いた次第。

渡米の際の団長が入野義朗氏で、彼から依頼を受けたと記憶して居る。

はじめて練習に立ち合った時の印象は、甚だ強烈で、弦の威力というものをひしひしと感じた。特に低音部が優れていた。指揮は斉藤秀雄氏が自ら当って居り、我れ乍ら大満足で帰ったことを思い出す。

入野・斉藤両氏とも今は亡く、感慨ひとしおなものがある。

（後に、斉藤氏の発案で、ティンパニ・鞭・鈴などを入れたことも有り、どちらでも良いという事になって居る。）

楽器編成：

弦楽合奏

ティンパニ2台、鈴、笏拍子

テープを伴った管弦楽のための「鄙歌」第一番 昭和三十九年

鄙歌 第一番

山形交響楽団の村川千秋氏から新作依頼の話があった時、まず頭に浮かんだのは、出羽三山の修験道であった。

もうひとつ、雪ふかい北国の人々が持つて居るに違いない特別な季節感ということも思うのであった。

春・夏・秋の三部から成る此の曲の生演奏が始まる前に、テープで、野鳥のさえずりが賑やかにきこえる。雪が消えて、春が来たのだ。

小鳥たちの歌う山道を、手綱ふり振り馬方がやって来る。

やがて郭公^{かくこう}が聞えて晩春となり、蜩^{ひぐらし}が啼いて夏。法螺貝と櫓太鼓で修験道たけなわ。

美しく淋しい秋が来て、やがて静かに静かに、音も無く冬に入る。

(冬の部分を書けという人と、このままで良いという人と有ることも付記したい。)

楽器編成：

フルート2、オーボエ1、クラリネット2、ファゴット1、ホルン2、トランペット1、トロンボーン2、ティンパニ5台、グロッケンシュピール、ヴァイブラフォン、タムタム、鈴(金属製高低)、土鈴大小多数、張扇、櫓太鼓、ピアノ、弦5部

管弦楽のための「うぶすな」 昭和六十年

うぶすな

もともとはNHKの委嘱で、箏と和楽器のために書いた十数名による合奏曲なのだが、初演以来ほとんど演奏されないので、この機会に、ピアノと管弦楽のために書き替えてみた。

三章から成る。第一章は祝詞の雰囲気、神前に於ける種々の楽器が鳴りわたり、笙、ひちりきも聞こえる、といった祈りの心を表わして居る。

第二章は自作の子守唄を主題として居り、哀調切々たる歌の部分。

第三章は、子供の頃に歌って遊んだ悪口うたを主題とした。粗野な感じで始まるが、のちには第一章、第二章で用いた旋律も再現して曲を閉じる、という仕組みになって居る。

楽器編成：

フルート2(2番はピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、グロッケンシュピール、笏拍子、神楽鈴、櫓太鼓、木鉦2、桶胴2、チャッパ、ドラ、ピアノ、弦5部

能面

民謡や郷土芸能ばかりやって来た私が、こういう曲を書くことになったのは、当時文化放送に居られた有坂愛彦氏のアイディアに依るものであった。

「頼政」^{よりまさ}「増女」^{ぞうおんな}「大癡見」^{おおべし み}の三つの面による印象と感動とを管弦楽で書くようにすすめて本物を見せてくれたり、素晴らしい能を観るように取り計らってくれたり、という様なことで、私も次第に其の気になって行った。

好運にも「頼政」を観た会場で買って来た謡曲本の中の和歌

埋木^{うめぎ}の 花咲く事も なかりしに

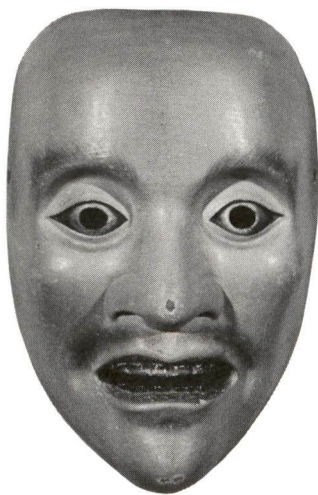
身のなる果ては あわれなりけり

これに節づけをして主題としたのが、冒頭のオーボエ独奏による旋律であった。これで元気が出て、一気に終りまで行けた事が懐しく思い出される。指揮の渡辺暁雄氏が謡曲をたしなまれるなど、三拍子揃ったりであった。

楽器編成：

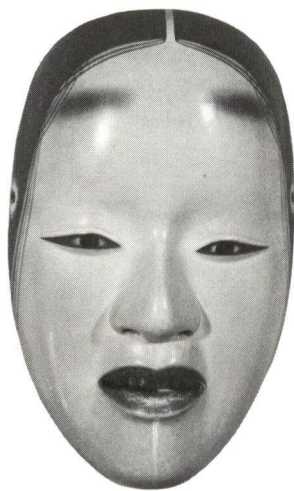
フルート2(2名ともピッコロ持替)、オーボエ2(2番はコール・アングレ持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ5台(3人)、バス・ドラム、タムタム、ピアノ、弦5部

終りに、「日本の交響作品展」に私を取り上げて頂いたことは誠に光栄であり、深く謝意を表したい。



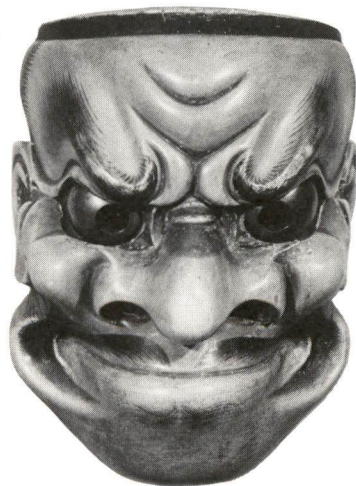
頼 政

宇治川の合戦に敗れ、平等院で自刃した頼政の無念の心情をあらわす。



増 女

増阿弥(ぞうあみ)が創作した女の表情。いかにも端正な面ざしで、美しい女神などに用いられる。

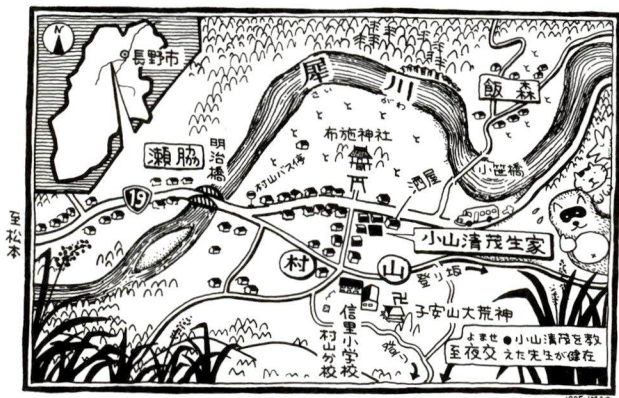


大癡見

口をきつく結ぶ意味の「ヘシム」からきた名称。自負尊大な態度で人々を威嚇する。

信里村字村山を訪ねて

二月のある朝早く東京を發った私は、長野駅近くから川中島バスに乗り、犀川にかかる明治橋のもと、村山に降り立った。ひと月ほど前、スキー・バス事故のあったのはもうひとつ先の大安寺橋。若い命を呑みこんだ犀川は、ここでも怖いように青黒く深みをたたえている。兩岸の樹々は、昨夜からの新雪で真っ白に化粧していた。



国道19号線はひっきりなしに車が通っているが、村は静まり返っている。幸い、もう一人ここで降りたのがNHKの集金員。その訪ね先について行って、店先でコンサートのチラシをひろげてみせると、「うちも同じ小山姓だが、この小山さんの家ならすぐそこだから、おじさんそこまで案内してあげておくれ」と親切にしてくれる。

「それそこに」と指さしてくれたが、垣根があるわけでもなし、表札を見るには庭に入って戸口まで近寄らなければならない。遠くからみるとどこもかしこも小山姓のようだ。それよりも村全体をつかみたいと、生家を確認するのはあとにして、旧道へとって返し、ちょっと歩くと、道はすぐに登りになる。

このまま行ったら川中島へ向かってしまうので、雪の上の足あとをたよりに急な右の登りをとると、やがてもうひとつの登り道にぶつかる。それを逆におりると、どうやらそこが村の中心らしく、大きなそり屋根がみえてきた。墓地を背負ったその寺は、子安山大荒神。村の菩提寺であり、農業の神様でもあるらしい。山門にかわって、衣掛枝垂桜の古木が、雪をかぶりながらも黒ぐると洞をみせている。

家いへの屋根が重なって見える向うの、松がこんもりしているところは神社のようだ。そのまま眼を上げれば、対岸の飯森、七二会、瀬脇。山にへばりつくようにして

数戸の家と畑が、雪にかすんでみえる。ここで犀川は大きく蛇行し、南側から村山、北から飯森が、巾着の底を合わせるようにせり出しているのだ。

眺めを頭におさめて道を下れば、そこが小学校の体育館。あまりの静けさにいぶかりながら校門に近づくと、信里小学校村山分校とある。一瞬、タイム・トンネルをくぐった気がして、足は自然に校舎入口に向かった。

職員室ではストーブが燃え、教頭先生が、忙しげに青焼きコピーをしておられた。こんどは、チラシだけでなく、小山清茂著作集『田螺のうたが聞こえる』を取り出して、ここにある通りの学校名をみて、なつかしさの余りとびこみましたと告げる。

ちょうどお昼どきで、お弁当をつかわれるついでに、私にまで熱いお茶と漬けもののお皿が出された。「これはこの生徒たちが作ったものですよ」といわれて、うれしく頂いた野沢菜は、ほんとうにおいしかった。

現在の生徒数は35人。先生は講師も入れて6人。一時は各学年が揃ったこともあったのに、またこのところ減ってしまったのだそう。黒板には大きく「四年生を送る会」と書いてある。分校には卒業式はない。

折りしも、その練習の歌ごえがきこえてきた。

鹿島槍 天澄みわたり

犀川は 清き動脈

ここ信里の高きおかべの…

草野心平作詞

小山清茂作曲

いうまでもなく信里小学校校歌であり、かつて、分教場から本校へと通った作曲家の、記念すべきおくりものというわけである。

本校への山道が、こどもの足で4・50分かかると、60年前と同じ。夜交、青池と興味深い地名がつづき、東には茶白山、西には高く鹿島槍。いずれも昔と変らぬ姿にちがいない。

山歩きの好きな私は、作曲家たちの人間像を知るためと称して、折りあればよろこんでそのふるさとを訪ね歩くことにしている。今回は、作曲家自身が詳しくふるさとを語ってくれているし、まさに打ってつけのチャンス。曲目のなかにも、いくつか、具体的にふるさとにゆかりの事柄がある。それらをたずねあはくことは、村がほんとうに小さいだけに、数時間の訪問でも可能だった。

まず小山清茂生家。東隣の、日夜祝詞をととなえていたという神主の家は昔の藁葺屋根のままのこっていた。ひとつおいて西隣の家の庭には、その昔、青年たちに謡や

仕舞を教えたという師匠の名が、`観世流 小山澤治、と、りっぱな石碑にきざまれて建っていた。

しかし、いま、土地の若い人たちは皆勤め人となり、農作業は片手間となり、盆踊りも、神楽も、能もすでに昔語り。広い河原は水底に沈み、いくら大声で悪口唄をうたおうと、川向うへ届きはしない。

60年、70年の歳月は、ただ流れたのでなく、時代が移ったのだ。

同年代の作曲家たち

小山清茂と同じ1914年生まれの作曲家には伊福部昭と早坂文雄がおり、次いで尾崎宗吉、戸田邦雄、小倉朗、柴田南雄、石桁眞礼生とつづく。

伊福部と早坂の二人はとくにデビューが早かったが、尾崎、小倉の方はかろうじて戦前さいごの作曲家世代に入った。そして、戦争による中断をのぞいて考えれば、小山清茂もはやり同年代の一群に入ると思う。

たとえば、小山清茂が、まだ音楽をやるとも考えなかった学生時代にハーモニカ合奏を楽しみ、そのレパートリーに「アメリカン・パトロール」などがあげられているのをみて、私は浜松生まれの尾崎宗吉を思い出した。尾崎は木琴が得意で、浜松で放送出演もしたことがあり、のちに小倉朗と作曲友だちになったとき、特製の木琴を持ち運びして、小倉のピアノとの合奏を大いに楽しんだという。

昭和初期、それはラジオ放送によって洋楽の啓蒙が熱心に行なわれ、洋楽レコードがよく売れ、さらに木琴やハーモニカという手軽な楽器が全国的にも大々的に普及した時代だった。もう洋楽が少数のものでなく、大衆的になりはじめた時代なのである。

小山清茂も、もうそのときはふるさとの村をはなれて長野に生活していた。長野といえは、とりわけ教育、文化に進取の気象に富んだ土地柄ではあるが、そんな特殊性を越えて、この時代、日本の洋楽普及はめざましかったのだ。そして、そのころになると当然のように作曲家になろうと考えたものも、すぐ一世代上の諸井三郎、清瀬保二らのころと比較にならないくらいたくさんいたらしい。

「らしい」というあいまいな言い方しかできないのは、まだこのあたりの資料が十分揃っていないからなのだが、柴田南雄が兄弟子にあたる尾崎宗吉について語ってくれた話のなかにも、当時はぞろぞろと書き手が現れて、それも歌曲ではなく器楽曲をどんどん書いたものだとあつ

た。また、清瀬保二のところへも作曲志望者の訪れがあり、なかに、田舎から入営のため上京し、いくつかの作品を預けたまま、戦争が終ってもついに還らなかったものもあったということである。

1937(昭和12)年の日中戦争開始から、さらに太平洋戦争へと戦線が拡大されたあの時代に、二十代のはじめだったこの世代にとって、最大の共通点は、戦争を絶対にのがれられなかった、ということだ。作曲家としてのデビューが前後錯綜しているのはもちろんそのためである。

と同時に、敗戦を前にして戦死してしまった尾崎の才能(注1)を惜しみつつ、小倉朗は、戦後いつそう自らを作曲の道へ追いこんでいった。同じように、多くの友人を戦争で失った小山清茂も、命拾いした人生なら、やりたいことを悔いなくやろうと決めた組にちがいない。

注1 尾崎宗吉(1915～1945)は諸井三郎の最初の弟子で、もっとも嘱望されたが、中国の戦線で戦病死した。作品には歌曲、室内楽、オーケストラ曲としては、「田園曲」がある。なお、クリティーク80・コンサート・ライブ・テープ《尾崎宗吉・室内楽の夕べ》が出ている。

(クリティーク80 Tel. 339—3439)

民族性のなかにみる個性

小山清茂の作曲家としての歩みは年譜にゆずるとして、自他ともに許す民族的作曲家としての特徴点についてはふれておきたい。

彼の場合、第一にいえることは、その民族性のルーツが、民謡や民俗芸能にあるということである。従ってその特色として、楽天的な生命力、明るさと力動感が強く感じられることである。

同じように田舎出身の清瀬保二と、似ていそうでちがうのは、清瀬の場合、もっとものがれられないルーツが近世邦楽にあったということではないだろうか。そのために、素朴で明るいといわれながら、私には、そのなかにきつと微かな哀感がひそんでいることを思うのだが、その点で小山清茂にはそのようなかなしさといったものは感じない。

事実、小山清茂のまわりには、近世邦楽らしいものはほんとうになかったらしい。その代りに、民謡や民俗芸能が、本来の力を失わずに生きていたのである。江戸の町人文化ではなく、中世芸能の流れをくむ能が楽しまれていたというわけである。

もうひとついえば、清瀬保二、小山清茂がともに末っ

子であること、昔なら珍しいことではなかったろうけれど、ちょうど自我のめざめる少年時代に父を失って、母のなげきを眼のあたりにするということ、それを機会にいつそう独立心が養われたことなど、生い立ちの点でよく似ている。ちがうのは、小山清茂がえがいている母。もちろん夫を亡くす前の母の思い出であり、私には、仕事をしながら必ずうたっていたという、その「天衣無縫」こそ小山清茂の音楽の本質のように思われる。今のところ、作曲家の人間というよりは、音楽が、そうであると思うのである。あえていえば、洗練とか、複雑さ、微妙さとかにはこだわらないのである。

ちなみにいえば、つい私など都会の戦時中育ちは神主の祝詞を、おごそかなものと考えてしまうが、どうもそんなのとは無縁のもっと人間くさいものであるようだ。何しろ病気を直してしまう念力があるというのだから。また、能といっても、東京の能舞台から察するようなものではなくて民俗芸能からもかけはなれてはいないものだったのだろう。そこにかげりのない楽天性の根源があり、それは、いまみてきた環境からも察しのつくことではある。

しかし、誤解してはならないのは、このしあわせなふるさとと民族的ルーツをもつ作曲家にしても、幼き日の記憶だけを素材に、現代の聴衆に訴える作品を書いているのではないということである。

現代の民族的音楽の創造

「信濃囃子」にしても、楽譜にはその扉に、信里村と記してあるが、それは作者自身の記念のことばであろう。「信濃」という普遍的な命名がいいあらわしているように、どこにも通じるお囃子であるのだから。

この曲でまず登龍門をくぐった直後、NHKサロンアンサンブルの仕事をはじめることになったのは、この作曲家のもうひとつの幸運だったと私は思う。

フルート、オーボエ、クラリネット、弦楽四重奏、ピアノというこのアンサンブルのために、自由に曲をえらんで編曲するというのは、当時、作曲家の経済的な糧となったばかりでなく、放送局に集められていた各地の多くの民謡採集レコードを利用して、好きなように採譜編曲し、ただちに音にして確かめることまでできたわけだから。

そこで10年も経験を積んだころ、新しい作曲グループの誘いがかかった。仕掛人は山根銀二(注2)であり、第一回は、管弦楽でやろうというのである。当時、作曲グ

ループは次々と生まれたが、管弦楽による作品発表会は三年前の「三人会」(芥川也寸志、團伊玖磨、黛敏郎)以来のことで、まだまだ珍しいことであった。

1957年10月3日、神田共立講堂、後援に文化放送、東京新聞社、都民劇場がならび、演奏は、その年春から定期演奏会を開始した日本フィルハーモニー交響楽団、渡辺晩雄の指揮で、第12回芸術祭参加として行われた。

当日のプログラムには、六人の世話人、伊藤隆太、貴島清彦、小山清茂、塚谷晃弘、深井史郎、牧野由多可の名で次のような趣旨がのべられている。

新音楽の会

現代音楽の表現法には色々ある。その一つ一つは作曲家の個性と、音楽の内容に応じていづれも可能である。

新音楽の会は特定の技法上の主張はしない。しかし生活の場をしっかりとふまえ、そこで培われたものを形にして行きたい。その場というのは私達の祖先の遺産と輸入されたものとを基礎にした環境の中にある。

いいかえると、祖先の遺産といっても祖先が築いたときの環境とは異った現代の中にある。輸入されたものもまた、それが育った国とは異った環境である日本という風土の中にある。そしてそれ等がばらばらに存在するのではなくて、それ等を基礎とした新しい環境が次第に作られている中に私達はいると思う。

こういう考えで音楽を掘り下げ、うたい上げて行きたい。

会には、牧野をのぞく五人が作品を出し、小山清茂の「管弦楽のための木挽唄」が芸術祭奨励賞を受賞。「木挽唄」は、スタートしたばかりの日本フィルのレパートリーになり、国内ばかりでなく、外国でもたびたび演奏され、今日に至っていることは周知のとおり。

趣旨にもあるとおり、この会は、「現代音楽の表現法には色々ある」(注3)ことを認め、それはそれぞれの個性と音楽の内容に応ずるものだとしている。彼らの共通理念として確認されたこの趣旨をとおして、私は小山清茂の創造理念をここで再確認しておきたいと思う。

というのは、たったいま書き進めながら、民族性の問題というどうしても、目にみえる外面的な所に片寄って、内的な表現内容の方が忘れられ易いとおそれるからなのである。

作曲家のうたい上げたいのは、現在及び未来への「生活の場」をふまえた内容なのである。祖先の遺産はすでに「祖先が築いたときの環境とは異った現代の中にある。」

そのことは、私もみてきたとおり。また「輸入され」、私たちが受け入れた洋楽も、洋楽が育てられた国とはちがう現代の日本という国の生活のなかにある。新しい環境、新しい生活は日々生まれている。その中にいる私たちは、だから、古いものを新しく現代の生命を与えて私たちの音楽とするのである。

注2 ^{やまねぎんじ}山根銀二(1906—1982)は、音楽評論家として、新聞の音楽批評欄を長く担当、その質を高めるのに貢献した。「ベートーヴェン研究」その他の著書があり、戦前戦後を通して、日本の作曲家たちの創作活動に注目、力をかけた。

注3 この年の8月、軽井沢で二十世紀音楽研究所主催で「第1回現代音楽祭」がひらかれ、いわゆる前衛音楽が6・70年代を通じてさかんになる。

新響練習風景から

おわりに、ひと足先に、練習をきいて味わったいくつかの曲についてふれる。

私もはじめてきく「信濃囃子」は、なるほど素直にたのしめる現代の「囃子曲」だ。笛、ひちりき、笙、なんでも洋楽器におきかえられて少しも不似合でないのが不思議でもあるが、いかにも合の手といった具合にユーモラスな音が出てくる。私は、それから「ひょっとこ」を連想するが、その短いフレーズは、けっこう複雑なリズム表現が必要で、譜面からはとても読みとれないニュアンスだ。しかも次々とちがう楽器に受けわたされていくのでみんな苦勞する。

それにしてもさすが、チェロのソロは、獅子舞の獅子のほのぼのとして情愛をみごとに表現してみせるではないか。

神楽を思い出すものは思い出せばよい。知らないなら、それなりに楽興のときを過ごせばよいのである。

今回の初演には、「うぶすな」が出されたが、私は、古希をこえた作者の、すばり我が懐しき心のふるさとを、現代オーケストラの表現力に托してうたい上げたかった気持ちをおつく感じる。

「うぶすな」第一章。太鼓を打ちならしながらの神主の祝詞は、なるほど、あのあけっぴろげの自然の中ならかなりはなれた隣家にもよくよくきこえたことだろう。いや、新響が吹き鳴らしたら、悪口唄だっていまでも大丈夫、向う岸までとどくことだろう。

新響も、これで日本の作曲家にとりくんで十年になるし、かなり日本的表現の経験も積んでいるはずと思うが、

「鄙歌第一番」では、明らかに尺八が想定されていたり、また、「ほら貝でなくとも良い」などと書いてあったりすれば、当然ほら貝のように吹かねばならないが、ホルン奏者にとっては、案外ほら貝のように吹くのはやさしいというが、ほんとうだろうか。たしかにけっこううまく吹いた。それにしても一度でもほんもののほら貝をきく機会があったらいいのに。

「尺八のようにうまく吹けないんじゃないくて、ぼくはほんとに尺八なんてきいたことないんだ」とがんばる人がいるかと思うと、「このアクセント記号のところは「むら息」でやるのですか」など研究熱心もいる。もちろん、尺八がほんとうに一度も耳に入ったことのない人がまさか今の日本にいるとは私も思わないが、意識してきいたことがないというならそれはほんとうだろう。

同じく「鄙歌」の終り近く、修験者たちの気合いのこもった「おうっ！」という声が必要だが、はじめての試みでもさすがみんなよく声が出た。出番外でドアの外に待機していた数人が、何事がはじまったかと勢いこんで入ってきて、大いにやる気をみせるのも頼もしい。

「能面」には、低音弦が延えんと語りうたう主要テーマがあり、かつてレコードに固定された音をきいたとき、それがただ、のっぺら棒に流れるのに欲求不満を感じ、あらためて、日本の声による抑揚表現の力強さを知った。これについても、「この旋律をきいてると、どうしても言葉をつけたくなっちゃう」と、これが声の抑揚表現であるといちはやく感じとる耳があるのはうれしい。

さてあとは、数多く多彩に活躍をせまられる打楽器群の課題だ。

でも、作者がいうように、「日本人ならきっとできる」と私も思う。「きれいにひかなくっていいんだから。力いっぱい出してくれさえすりゃいいように書いてあるから」というのに、「それなら新響は得意だ」という声も飛ぶが、それも自分が信じなければできないこと。まず裸になって、それこそ、「やるっきゃない」のだ。

私にとっても、おそらくほとんどの方にとっても、小山清茂作品をこんな風に通してきくのは初体験であろう。ほんとうの作家論、作品論はこれからであることをおことわりして、筆を置かせていただく。

小山清茂年譜 (引用は特に記さない限り、小山清茂著作集『田螺のうたが聞こえる』より)

1914
(大正3)

1月15日、長野県更級郡信里村字村山(現在長野市篠ノ井村山)の農家、小山弥五郎・きたの三男として生まれる。

「祖父母も、父母も夫婦仲は良かった。母は、健康で、いつも朗らかで、仕事をしながら必ず何かの唄をうたっていた。美声ではないが音程は確かで、リズムも快く、それに即興の文句を作ってしまうのが上手だった。」

1920
(大正9)

信里小学校村山分教場に入學。

「一、二年が一組、三、四年が一組、したがって先生も二人だけという学校に入學した。一年生の冬、餅搗きがはじまる頃に電灯というものがついた。村中が一度にパッと明るくなって、大人も子供も感嘆の溜息を洩らした。」

五年からは四キロ程山を登った青池の本校に通う。

このころ、父、急死。

「母は失神したようになり、夜も昼も泣き暮らし、私を抱きしめては「一緒に死のう」といって困らせた。家の中は一度に暗くなり、いさかいの音が絶えなくなってしまった。あんなに明朗だった母の口からは歌声が聞かれなくなり、私は考え込む子供に変わった。」

1926
(大正15)

長野中学入學、犀川沿いの道を六キロ歩いて川中島駅へ、長野駅からも一キロ半。冬は下宿生活。

二年の頃より短歌をはじめ、のち川崎杜外に師事する。「短歌雑誌」「蒼穹」「国民文学」に投稿。

「故郷のをさなご達もとく起きて鳥追いすらむ拍子木持ちて」
「大寺のみ庭に風の吹き来れば舞の袂はみな揺れにけり」

1931
(昭和6)

長野師範二部入學。不況のため、大学文学部入學の夢をやむなく変更する。

音楽好きの仲間で、ハーモニカ楽団をつくり、「越後獅子」「アメリカン・パトロール」などを楽しむ。

師、山田龍男(上野の甲種師範科出身)に出会い、音楽に夢中になる。

1933
(昭和8)

長野師範卒業。

1934年満20歳で徴兵検査、5ヵ月間入隊。教師は、その職を国民兵役とされ、戦場に召集されることはなかった。

長野県下での8年間の教員生活はじまる。下伊那郡福与小学校、上水内郡芋井小学校、埴科郡屋代小学校、北佐久郡軽井沢小学校。

辰野咲人(北原白秋の弟子)らと同人7名で、詩誌「星林」を発行する。(昭和8年～11年)

併行して、山田龍男、金子登(ピアノ)、安部幸明(和声学)らに学ぶ。ピアノを月賦で買う。

1941
(昭和16)

3月、音楽をやってみることを決意して上京する。

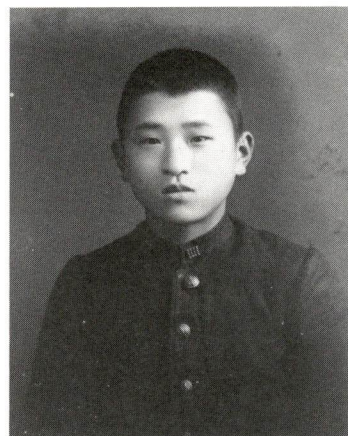
豊島区長崎第五国民学校に奉職。

安部幸明の下で和声学をつづける一方、東京市教職員管弦楽団(指揮・沖不可止)に入り、はじめシンバルを、次いでフルートをおぼえ、組曲「アルルの女」のソロ・パートを受けもつまでになる。

同上管弦楽団指揮の渡辺浦人の「野人」、伊福部昭の「交響譚詩」に



清茂坊やの左、母、右祖母、後祖父、おば。



長野中学三年生



徴兵検査で甲種合格。五ヵ月入隊後、伍長で除隊のとき

刺激を受ける。

戦火はげしくなり、生徒を伴って、福島県相馬郡中村へ集団疎開。そこも艦砲射撃のおそれありとされ、さらに西会津の山都村へ再疎開、そこで敗戦の日を迎える。

1945
(昭和20)

その年、神戸出身の山田龍男の弟子、徳永淑子と結婚。

1946
(昭和21)

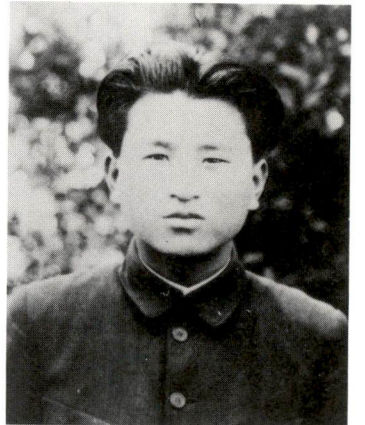
「信濃囃子」第14回音楽コンクール第一位に入賞。

清瀬保二による批評（『音楽芸術』1946年7・8号より抜粋）

「題名の示す如く民謡風の囃しでナンセンスといってしまうべしそれ迄だが面白い。この面白さは半面危険も伴ふもので、たゞオーケストレーションの面白さに終るとか、たゞ一回の演奏で、コンクールに有勝ちな他の地味な作品より眼を引くに止まるとかいふ風になると、作曲家としての成長に危険がある。この作品はさうした軽音楽的傾向から救はれてゐるが所謂いい気になって調子に乗らないように今後に希望する。」



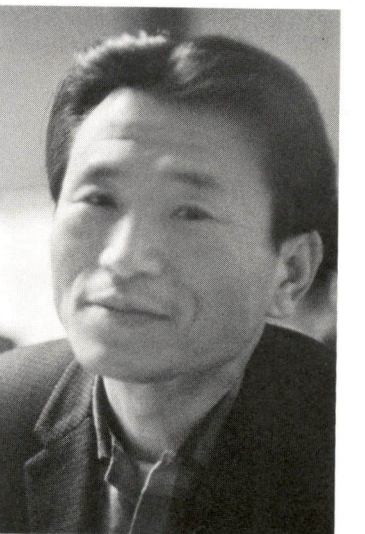
詩誌「星林」の仲間と。芋井小学校時代の下宿、茂管の鉱泉旅館で。



音楽への志し止みがたく上京の頃。昭和16年春。



1952年4月から一年間、芸大に委託生として若い学生にまじって学んだ。



「新音楽の会」発足のころ。

1947
(昭和22)

新制となり豊島区立第十中学校、次いで久留米中学校教諭に。

1949
(昭和24)

現住所、武蔵野の雑木林のなかの東久留米市氷川台に落ちつく。
この頃、NHKサロン・アンサンブルのために日本民謡を多数編曲。
そのために、NHK所蔵のSPレコードより採譜、10年間続ける。

1950
(昭和25)

作曲グループ「白涛会」（金井喜久子、平井康三郎ら）に参加、歌曲などを発表する。

1952
(昭和27)

東京都派遣委託生として、一年間芸大の池内友次郎クラスで、和声と対位法を学ぶ。
四家文子が、毎日新聞社後援で募集の歌曲入選。以後、同邦人歌曲リサイタルで「手まり唄」など愛唱される。

1955
(昭和30)

久留米中学校をさいごに教職を退く。

1957
(昭和32)

新音楽の会（深井史郎、貴島清彦、塚谷晃弘、伊藤隆太、牧野由多可）に参加。

10月3日、同上第一回作品発表会（文化放送後援、演奏・渡辺暁雄指揮、日本フィルハーモニー交響楽団、神田共立講堂）で「木挽唄」初演。引きつづき、同フィルのレパートリーになる。

12月21日、ブリヂストン・作曲家の個展第14回に同年の秀作のひとつとしてとりあげられる。

「曲の途中で、櫓太鼓が「ドンドコドンドコ……」と鳴り出すと、客席から微かな笑い声が起りはじめました。「ウフフ」とも聞こえるし「クスクス」とも聞こえます。そして、その瞬間から客席は、たいそうなごやかな空気に満たされたのでした。」

1958
(昭和33)

10月11日、新音楽の会第2回に歌曲「夏鶯」「信濃古謡」など。
中部日本放送委嘱により、草野心平台本の組曲「木曾」を作曲、以後、同詩人とのコンビによる合唱曲など多く生まれる。信里小学校校歌もそのひとつ。

1959
(昭和34)

交響組曲「能面」芸術祭参加番組として文化放送初演、同奨励賞を受く。



主要作品表

曲 名	作曲年代	演奏時間	出版・レコード	委嘱・初演・その他
管 弦 楽				
管弦楽のための「信濃囃子」——2管編成	1946	13'	音友	1946年6月3日 山田和男指揮＝日本交響楽団により初演 第14回音楽コンクール第1位
管弦楽のための「木挽歌」——2管編成	1957	11'	音友 キング・ビクター CBSソニー	1957年10月3日 「新音楽の会」第1回発表会で、渡辺暁雄指揮＝日本フィルハーモニー交響楽団により初演 吹奏楽編曲版は音友より出版、レコードはフォンテック 東芝
組曲「木曾」(台本・草野心平)——語り、独唱、合唱、1管編成	1958	22'		中部日本放送委嘱 1958年10月 水島弘、立川澄人、岩城宏之指揮＝日本フィルハーモニー交響楽団、東京混声合唱団により初演
交響組曲「能面」——2管編成	1959	23'	音友 コロムビア	文化放送委嘱 1959年11月5日 渡辺暁雄指揮＝日本フィルハーモニー交響楽団により初演 芸術祭奨励賞
交響詩「山の歳時記」——2管編成	1961	28'		文化放送委嘱 1961年10月15日 渡辺暁雄指揮＝日本フィルハーモニー交響楽団により放送初演
バレエ「かぐや姫」(台本・川路明)——1管特殊編成	1962	1.30'		松尾バレエ団委嘱 1963年1月26日 三石精一指揮により初演
弦楽のための「アイヌの唄」——弦5部、(打楽器2を…加えることもできる)	1964	6'	音友 コロムビア	桐朋学園委嘱 1964年5月23日 斉藤秀雄指揮＝桐朋学園オーケストラにより初演
風土四章——三味線、尺八、箏、太鼓、2管編成	1966	25'		NHK委嘱 1966年 杉浦弘和、横山勝也、松尾恵子、田村拓男、若杉弘指揮＝東京フィルハーモニー交響楽団により放送初演 のち「南部午方幻想」として五条雅己が振付けた
テープを伴った管弦楽のための「部歌」第1番——1管編成	1976	16'30"		山形交響楽団委嘱 1976年6月11日 村川千秋指揮＝山形交響楽団(第8回定期)により初演
管弦楽のための「部歌」第2番——3管編成	1978	13'	音友(予定) 音楽センター ビクター	日本フィルハーモニー交響楽団委嘱(委嘱作品シリーズNo27) 1978年6月8日 渡辺暁雄指揮＝日本フィルハーモニー交響楽団(第303回定期)により初演
管弦楽のための「部歌」第3番——2管編成(もりこうた変奏)	1981	15'	コロムビア	京都市交響楽団委嘱 1981年12月25日 佐藤功太郎指揮＝京都市交響楽団(第239回定期)により初演
もぐら追ひ〈管弦楽のための〉——2管編成	1984	3'		「反核、音楽家のつどい」のすすめによる 1984年7月13日 岩城宏之指揮＝新星日本交響楽団により初演
管弦楽のための「うぶすな」——2管編成	1985			新交響楽団委嘱 1985年4月7日 芥川也寸志指揮＝新交響楽団により初演
室内管弦楽・室内楽				
山の分校の記録——室内管弦楽・12名(テレビ・ドキュメンタリー付随音楽)	1959			NHK委嘱 1959年11月3日 作曲者指揮＝NHKサロンアンサンブルにより放送初演 1960年イタリア賞第2位(トリエステ市観光賞)
アイヌの幻想——室内管弦楽・14名	1963	14'		東京労音委嘱 1963年2月労音例会 高橋安治他により初演
アンサンブルの為の日本民謡集——室内管弦楽・6～15名	1963	各2'30"～6'	音友 コロムビア	NHK委嘱 日時不詳 作曲者指揮＝NHKサロンアンサンブルにより初演
①八木節 ②おてもやん ③鹿児島おはら節 ④相馬盆唄 ⑤かっぱれ ⑥越後獅子 ⑦阿波踊り			(阿波踊り)、有信堂フォノシート(相馬盆唄)	
木曾の四季——室内管弦楽、30名(テレビ・ドキュメンタリー付随音楽)	1975	25'		中部日本放送委嘱 1975年11月5日 佐藤功太郎指揮＝東京都交響楽団メンバーにより初演 芸術祭優秀賞
アンサンブルのための「わらべ唄」——管弦打七重奏	1983			日本フィルハーモニー協会委嘱 1983年10月26日 日本フィルハーモニー交響楽団メンバーにより初演

曲 名	作曲年代	演奏時間	出版・レコード	委嘱・初演・その他
合 唱				
誕生祭(詩・草野心平)——バリトン独唱と 混声合唱、無伴奏	1961	11′	カワイ キング	東京混声合唱団委嘱 1961年1月28日 岩城宏之指揮＝東京混声合唱団 により初演
ちょんがれ武左衛門(詩・佐藤春夫)——合唱絵巻 バリトン独唱と混声合唱、打楽器3名	1963	50′		東京労音委嘱 1963年4月労音例会 田中信昭指揮＝東京混声合唱団、観世栄夫演出により初演
四つの仕事唄——テノール独唱と男声合唱、櫓太鼓 ① 囃し田(広島県民謡) ① 石切唄 ③ 胴搦き ④ 酒屋唄(岩手県民謡)	1963	17～8′	カワイ ビクター	朝日放送委嘱 1963年11月27日 田中信昭指揮＝東京混声合唱団 により放送初演
日本のみのり(詩・中村千栄子)——混声4部、男声4部、… 女声3部、ピアノ伴奏	1968	3′30″	日本放送出版協会	N H K 委嘱 1968年3月22日 山本金雄指揮＝東京放送合唱団 により放送初演 全国ラジオ唱歌コンクール課題曲
一月の祭典(詩・草野心平)——テノール独唱と 混声合唱、打楽器3名	1968	12′	カワイ	信越放送委嘱 1968年11月29日 岩崎常治郎指揮＝S B C 合唱団 及び岡谷合唱団により放送初演 副題「坂部の冬祭」
天地創成(詩・草野心平)——混声合唱とテープ	1970	11′	全音	文化放送委嘱 1970年9月6日 作曲者指揮＝日本合唱協会によ り放送初演
歌 曲				
おくめ、おつた、おきく——独唱、ピアノ (詩・島崎藤村)	1963	23′	音友(2曲のみ)	文化放送委嘱 1963年11月9日 栗本尊子、ピアノ三浦みどりに より放送初演 「おくめ」「おきく」は「邦楽4人の会」の委嘱による 和楽器伴奏版もある
民謡集「夏鶯」より(詩・藪田義雄) ① 赤い夕日の ② 雛雀 ③ 夏鶯 ④ 意見 ⑤ 寒鰯 ——バリトン独唱、箏、十七絃、篠笛、打楽器	1967	9′	音友	N H K 委嘱 1967年12月3日 友竹正則、坂井とし子、宮本幸 子、向山英一郎、鞍掛昭二により初演
赤土になる妹(詩・土屋二三男)——箏ひき歌い	1971	12′	全音	小沢道委嘱 1971年11月2日 小沢道により初演
樹下の二人(詩・高村光太郎)——箏ひき歌い	1975	11′		友洩のりえ委嘱 1975年11月21日 友洩のりえにより初演
奥のほそ道(作・松尾芭蕉)——箏と薩摩琵琶ひき歌い	1975	24′		小沢道委嘱 1975年11月10日 小沢道、鶴田錦史により初演
いま一度春を(作・中田ちゑ)——箏ひき歌い	1976	15′		友洩のりえ委嘱 1976年10月16日 友洩のりえにより初演
羽衣(詞・土屋二三男)——十三絃箏ひき歌い、 打楽器・フルート各1を伴う	1980			友洩のりえ委嘱 1980年11月7日 友洩のりえにより初演
首つつりと川流れの歌——独唱とピアノ	1982			越賀理恵委嘱 1982年11月12日 越賀理恵により初演
花の絵島——箏、三味線ひき歌い	1983			友洩のりえ委嘱 1983年10月26日 友洩のりえにより初演
ピアノ曲				
かごめ変奏曲——独奏	1966	5′	春秋社 全音 コロムビア	桐朋学園委嘱 1966年小高ひろ子により初演
雁雁わたれ変奏曲——独奏	1969	5′	カワイ 春秋社 全音	カワイ楽譜委嘱 初演不詳
舞台作品				
楢山節考(原作・深沢七郎、台本・三枝嘉雄) ——音楽劇・独唱、合唱、児童合唱、室内オケ	1957	1.00′		N H K 委嘱 1957年6月22日 伊藤武雄、三枝喜美子、立川澄 人、栗本正 岩城宏之指揮＝ラモー室内楽団、東 京放送合唱団により初演 1971年11月11日 久山恵子指揮＝東京放送合唱団、 栗本正ほか、により演奏の際、小編成に改編され た。東芝レコード(T A - 9314)及び全音の出版譜 はこの版による 文化庁移動芸術祭、青少年芸術劇場の学校音楽鑑 賞の演目として、手織座が全国を巡演中
妄執の火(作・平岩弓枝)——舞踊劇・ バリトン、混声合唱、筑前琵琶、室内オケ	1963	40′		N H K 委嘱 1963年 西川鯉三郎踊り、三枝孝栄演出によりテ レビ初演

曲 名	作曲年代	演奏時間	出版・レコード	委嘱・初演・その他
山城国一揆(原作・タカラ・テル、台本・村山知義)……—歌劇・独唱、合唱、2管オケ	1965	2.00'		東京労音委嘱 1965年10～12月労音例会 岡村喬生、小田清、滝沢三重子、中沢桂、成田絵智子他 上田仁指揮＝A B C交響楽団、二期会、藤原歌劇団、東京労音合唱団により初演 初演以来70回上演
最終の祭祀(いやはての祭)——舞踊曲・Fl、2 Ob、Cl、… Fg、Perc、3 Hp、ピアノ、弦5部	1969	30'		二代目西崎緑委嘱 1969年11月3日 二代目西崎緑ほかにより初演
さんしょう太夫(台本・ふじたあさや)——歌劇・独唱、合唱、室内楽7名	1972	1.30'		日本オペラ協会委嘱 1972年3月29日 宮本昭太ほか日本オペラ協会、荒谷俊治指揮、武智鉄二演出により初演
オペラ嘶「こんにやく問答」(台本・まえだ純)——歌劇・独唱、重唱、児童合唱、1管オケ	1974	40'		日本オペラ協会委嘱 1974年10月3日 友竹正則ほか 山田一雄指揮＝新星日本交響楽団により初演

和 楽 器

和楽器のための「四重奏曲第一番」——十三絃箏2、… 十七絃、尺八	1962	15'	音友	N H K委嘱 1962年6月29日 伊藤松博、高野和之、兼安忠子、山口五郎により放送初演
箏と和楽器による「うぶすな」——箏、十七絃、胡弓、… 三絃、琵琶、笛、笙、簞簫、尺八、打楽器、コントラバス	1962		音友	N H K委嘱 1962年10月25日 藤井凡大指揮 松尾恵子、多忠麿、山本邦山らにより放送初演 芸術祭奨励賞
和楽器のための「四重奏曲第二番」——十三絃箏2、… 十七絃、尺八	1968	9'	全音 東芝	1968年10月3日 邦楽4人の会により初演
和楽器のための「三重奏曲」——箏2、十七絃	1968		全音	N H K委嘱 1968年8月3日 「さわらび会」により公開録音、8月18日放送
和楽器のための「五重奏曲」——尺八、薩摩琵琶、… 箏2、十七絃	1973	13'		「さわらび会」委嘱 1973年10月31日 半田綾子、羽賀幹子、吉川富子、藤田都志、坂田宏聡
絃五十七——二十絃2、十七絃	1976	6'		二十絃箏霜月の会委嘱 1976年11月13日 野坂恵子、吉村七重、池上早苗により初演
和楽器のための「変奏曲」——尺八、箏、十七絃合奏	1978			創明合奏団委嘱 1978年12月8日 創明合奏団、小野衛により初演
「主題と変奏」——十七絃箏、打楽器各1	1979			菊池梯子委嘱 1979年11月1日 菊池梯子、吉原すみれにより初演

吹 奏 楽

イングリッシュ・ホルンと吹奏楽のための音楽…… I. 田植歌 II. 花祭り——Eng、Hr、小編成の吹奏楽	1969	8'	東芝	American Wind Symphonic Orchestra 委嘱 1969年、同オーケストラ Robert Austin Boudreauにより初演
吹奏楽のための「太神楽」——大編成の吹奏楽	1971	5'30"	音友 東芝	東京音楽大学委嘱 1971年5月22日 村川千秋指揮＝東京音大シンフォニック・ウインド・アンサンブルにより初演
行進曲「信濃路」——大編成の吹奏楽	1978			「やまびこ国体」長野県実行委員会委嘱 1978年 第33回国民体育大会
吹奏楽のための「花祭り」——中編成の吹奏楽	1979		C B S ソニー	昭和55年度の課題曲として全日本吹奏楽連盟委嘱 1980年全国各地にて演奏

- 注1 歌曲(1950～1967)は「小山清茂歌曲集」(音友)に前出7曲を含めて全21曲が収められている。
注2 カワイ楽譜版は目下入手困難。なお、レコードは、発売された事の判っているものを記したが、作曲者の不注意による記載洩れもあろうし、又現在廃盤となっているものも少なくない。例えば音楽劇「檜山節考」や交響組曲「能面」などは廃盤という情報を得ている。(1980年3月現在)



STEINWAY & SONS

スタインウェイを選ぶ それは、「妥協」との訣別。

繊細な音楽をあますことなく表現する

芸術家の感性、そこに妥協はありません。

内外の著名ピアニスト、全世界のコンサートホール、

そして録音スタジオが選んだ

スタインウェイ コンサート グランド ピアノ、

お確めください。貴方の指で、心で…。



弊社ショールームは数々のスタインウェイ ピアノを心ゆくまでご試弾頂けるよう、最高のコンディションで常設するばかりでなく、ノイペルトチェンバロ、ライオンヒーリー ハープ、小型パイプオルガン等も取り揃え皆様のお越しを心よりお待ちしております。

※美しいカタログを用意しております。機種名をご記入の上、お申し込みください。

※お求めやすい長期(2~60回)ローンのお取り扱いをしております。ご利用ください。

株式会社

日本総代理店

松尾楽器商会

東京都港区芝大門1丁目9番1号

国電：浜松町駅下車7分 地下鉄：大門駅(都営浅草線) 御成門駅(都営三田線)下車4分

TEL.(436)4331(代)

SONY

COMPACT INNOVATION
小さくして、高画質にする。それは、いつもソニーの仕事です。

(電子の目) これがソニーのCCD8ミリビデオです。

日本初のカメラ一体型コンパクトビデオ(世界127社統一フォーマット)。
外で、カメラのように、手軽に撮影したい。
長いあいたの人々の夢を実現した「Video 8」、その特長をご紹介します。

●旅先で再生画像も確認できる
電子ビューファインダー

●裏面は各種機能を
集中的にコントロールするパネル

●指1本で簡単にきれいな
つなぎ撮りができます。
プロ機に使われているフライングイレースヘッドを搭載、
スタート、ストップが指1本で簡単にでき、
きれいなつなぎ撮りが楽しめます。

●撮影後は、テレビに接続して、即再生

撮影後は、ビデオデッキに早変わり。
別売のチューナータイマーと組めば、
テレビ録画や留守録画が楽しめます。

●手軽に持ち出せるカメラ一体型ビデオ

本体重量わずか1.97kg。
小型軽量の一体型なので、これ1台で、
どこでもカンタンにカメラ録りが楽しめます。

●ベータハイファイと同じ高音質
音声の記録は、すばらしい音質で定評の
AFM方式(モノラル)を採用。

●誰でも美しく撮れるCCDカメラ搭載

画素数を19万個から
一挙に25万個にした新開発CCDが、
解像度を30%アップ(当社比)。
これはソニー半導体技術の結晶。

●望遠、広角撮影が楽しめる
6倍電動ズームレンズ
接写もできるマクロ機構付。

●充電式バッテリー(別売)1本で
最長1時間の録画・再生が可能
別売のACP-80を使えばAC電源も利用できます。

●録画時間は最大2時間

P6-120使用時(近日発売)

●持ち運びに便利な超小型テープ

タテ62.5ミリ、ヨコ95ミリ、厚さ15ミリ。
オーディオ用カセットテープとほぼ同じ大きさ。
高画質、高音質を生むソニー独自の
メタルテープ採用です。



コンパクトビデオ
CCD Video 8
新発売 コンパクトビデオ CCD-V8 **¥280,000**

●マルチアングルファインダー・ショルダーベルト付属 ●最大外形寸法:幅117×高さ193×奥行342mm(収納時) ●重量:1.97kg
(バッテリー、カセット含まず)

単なる新製品ではありません。新しい時代を告げるビデオです。

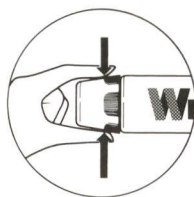
8 録画・再生について ●このビデオは8ミリビデオ方式です。[8]マークのついたビデオカセットテープ以外は使用できません。 ●このビデオで録画したテープは、8ミリビデオ方式を採用している全社のビデオと互換性があります。 ●あなたが実
演や興業、展示物などを撮影したもの、個人として楽しむものなどは、著作権法上、権利者に無断では使用できません。なお、実演、興業、展示物などのうちには、これらの主催者(管理者)が、会場等の管理権に基づき、個人とし
て楽しむなどの目的の撮影であっても、制限している場合がありますのでご注意ください。 ●あなたがテレビ放送や録画物などから録画したものは、個人として楽しむものなどは、著作権法上、権利者に無断では使用できません。 ●カ
タログ送呈=住所、氏名、年齢、職業、電話番号、機種名を明記の上、〒108東京都高輪局区内ソニー一棟カタログ係へハガキでお申し込みください。
(上手に使って上手に節電)

——音楽著作権をまもる——
JASRAC

たったひとつのオタマジャクシも大切にしていきたい。

社団法人 日本音楽著作権協会(音権協)
理事長 芥川 也寸志

ボクんち、プッシュポン。



家族みんなが安心して使える
ハミガキは、白い歯のための
ホワイトアンドホワイトライオン。
プッシュポンキャップだから
とても使いやすい。
白い歯キラリ、健康な歯を守
りましょう。

白い歯のための白いハミガキ

**ホワイト
アンド
ホワイト
ライオン**

医薬部外品50g・100g・180g(50gは従来のキャップです)

ライオンの
ハミガキ製品

ライオン株式会社

一泊二圓五十錢

「東洋最大・全館冷暖房」を謳い文句に、

昭和十三年、開業。その画期的な

規模と設備に加えて、いち早く

「定額低料金」を採用。

新橋第一ホテルは、文字通り、

シティホテルの先駆をなしたのです。

以来四十余年、常に創業の心を忘れず、

快適で安全なホテルづくりに努めています。

シングル¥9,000より(税・サービス料別)



新橋駅から歩いて2分

新橋第一ホテル

東京都港区新橋1-2-6 ☎03(501)4411
●ご予約は東京レザベーションセンター ☎03(501)5161

